

IIBC NEWSLETTER

November 2022 Vol. 147

西條 正明氏



特集

世界へと飛び立つ若者をサポートする
「あなたと世界をつなぐ」
IIBCの取り組み

p2 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
理事長 大橋 圭造

p3 文部科学省 官民協働海外留学創出プロジェクト
トビタテ! 留学 JAPAN プロジェクトディレクター
荒畦 悟氏

p5 文部科学省 大臣官房審議官
(高等教育局及び科学技術政策連携担当)
西條 正明氏

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
GHRD 室 室長 貴島 和美

荒畦 悟氏



英語がもたらした 私のターニングポイント

p10 YouTuber / 英語発音トレーナー
だいじろーさん



English Frontline

英語を実践する場を市民に提供する
「英語が話せるまち SASEBO プロジェクト」

p14



Special Interview

海外留学に向け必要な英語力と
TOEIC® S&W の効果的な活用法とは

p8 群馬大学 国際センター 准教授 学長特別補佐(グローバル化)
越智 貴子氏



IIBC 2022年11月発行

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

世界へと飛び立つ若者をサポートする 「あなたと世界をつなぐ」 IIBCの取り組み

IIBCは、TOEIC® Programを中心事業として行うとともに、グローバル人材の育成に関わる活動も行っています。私たちが果たそうとするそれらの役割を明確に打ち出すため、10年にわたり使用してきたコーポレートスローガンを、2022年4月に変更しました。今号では、新しいスローガンに込めた思いと、その実例となる「官民協働海外留学創出プロジェクト トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム」への支援について紹介します。

主役である「あなた」をIIBCが支える

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 理事長 大橋 圭造

IIBCの役割は

世界へと飛び立つための後押し

IIBCは2022年4月、コーポレートスローガンを変更しました。12年4月より10年間にわたり掲げてきた、「世界は、あなたでつながる。」に代わる新たなスローガンは、「あなたが世界をつなぐ あなたと世界をつなぐ」です。

IIBCでは、「人と企業の国際化の推進」への貢献を基本理念とし、英語でのコミュニケーション能力の向上や、グローバル人材の育成に関わる活動を行っています。今回スローガンを変更したのは、私たちが事業を通して目指していることを、よりシンプルかつストレートに表現したいと考えたからです。

スローガンの中にある「あなた」とは、グローバルコミュニティで現在活躍されている、もしくは、これから活躍したいと考えられている方のことです。海外留学や海外駐在など、実際に海外で活動する形もあれば、日本国内でグローバルな仕事に携わるなど、活躍の仕方は人それぞれですが、いずれにしても、

その活動の主役は「あなた」ご自身です。そのため新スローガンの前半部分では、主役である「あなた」を前面に打ち出したいと考え、「あなたが世界をつなぐ」としました。

一方、IIBCの役割は、主役である「あなた」が世界へと飛び立つための後押しをすることです。そのために、中心事業

として行っているのがTOEIC® Programです。また、英語学習を支援する様々な教材の開発を手掛けるとともに、グローバルシーンの最前線で活躍されている方たちの生き方などが学べるイベントや情報提供にも力を注いでいます。このような私たちが果たそうとしている役割をはっきりと打ち出したいと考え、新スローガンの後半部分は、「あなたと世界をつなぐ」としました。

支援を通じて

若者の成長をサポート

「あなたと世界をつなぐ」取り組みの1つとして、14年度より文部科学省が展開を始めた、大学生や高校生の海外留学をサポートする、「官民協働海外留学創出プロジェクト トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム」への支援を挙げることができます。寄付を行うとともに、20年度から22年度にかけては、IIBCの職員1名をプロジェクトの事務局に派遣しました。

プロジェクトに応募してくるのは、「自分が世界をつないでいこう」という意気に燃えている若者たちです。彼ら、彼女らに、海外体験の機会を提供することで世界へと目を向けてもらい、その成長を支援していくことがプロジェクトの目的です。まさに私たちが新スローガンに掲げている「あなたと世界をつなぐ」取り組みであると言えます、IIBCが目指しているものと一致していることから、このプロジェクトに協力してきました。

これまでもIIBCは、「世界をつないでいこう」と意欲的に活動する「あなた」を1人でも多く増やしていくことや、そうした「あなた」を、世界とつなぐための支援に取り組んできました。新スローガンにおいて、私たちの思いを明確に言語化したことを契機に、IIBCの事業を通じて、あるいは主旨に賛同する外部のプロジェクトへの支援を通して、一層その実現に励んでいきたいと考えています。

自己理解を深め視野を広げる留学経験

文部科学省 官民協働海外留学創出プロジェクト トビタテ! 留学 JAPAN プロジェクトディレクター 荒畦 悟氏

これまでの留学の概念を 覆すプロジェクト

「トビタテ! 留学 JAPAN」は、日本の若者たちの海外留学への機運を醸成することを目指して、13年より始まった留学促進キャンペーンです。20年までに、大学生の留学者数を12万人に、高校生の留学者数を6万人に倍増させることが目標に掲げられました。

このキャンペーンのフラッグシップになる取り組みとして14年に立ち上げられたのが、IIBC様にも支援していただいている「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム」です。同プログラムでは、20年までに大学生、高校生1万人を留学させることが目標として定められました。しかし途中で、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るったため、プロジェクトは2年延長され、その影響を受け待機していたトビタテ生(奨学生)の派遣を今年度まで行う予定です。さらに、23年度以降も募集形式などの変更を行った上で、継続して実施することになりました。

「日本代表プログラム」の特徴は、従来の留学の概念を覆したことです。留学の目的や行き先、期間などは、本人が自分で計画を作成します。大学などでの学習や研究だけでなく、インターンシップやボランティア、フィールドワークなどを目的とした実践活動経験も留学とみなします。そのため若者たちが作成した留学計画は多岐多彩です。

プロジェクトの運営資金や、留学生への奨学金(返還義務のない給付型)は、全て民間の企業・団体、個人からの寄付で賄われています。留学生の選考を行うのは、主に支援企業の担当者の皆さん。選考の際は、学業成績や語学力は不問となり、その代わり本人の情熱や好奇心、独自性が強いかが選考基準となります。



タンザニアでのインターンシップ

留学中、トビタテ生たちは、基本的に自分が立てた計画を実行するために、独力で道を切り開いていかなくてはなりません。ただし希望者に対しては、支援企業の担当者が様々な相談に乗るメンタリング制度が設けられています。トビタテ生同士がSNSを活用して連絡を取り合い、お互いに励まし合うといったことも盛んに行われています。

プロジェクトでは、トビタテ生同士のコミュニティ作りをとても重視しており、事前研修や事後研修などの場で、トビタテ生がお互いのことを知り、関係を深める機会を多く設けています。そのため留学中も孤独に陥ることはなく、また留学後もその関係がずっと続いていきます。

軽やかに国境を越えて

行動する人材が育つ

留学から帰って来たトビタテ生と話をすると、「海外経験を通じて大きく成長した」と感じるものが数多くあります。

用意されたプログラムではなく、自分で立てた計画に基づいて留学をするため、例えば、実際に現地に行ってみると、予定していたインターン先がなくなっていたなど、予想外の事態をいくつも経験することになります。このようなアクシデントを切り抜けることで、「今後どんな境遇に置かれたとしても、自分なら何とか乗り越えられる」という自信につながるのです。

またトビタテ生からよく聞くのは、「海外に出て、日本とは全く違う価値観や文化の中に入り込むことで、初めて日本や自分自身のことを深く考えるようになった」という言葉です。彼らにとって留学経験は、自己理解を深めるとともに、視野を広げる貴重な機会となっています。

さらに、「現地の人と深く関わるためには、やはり語学力が不可欠であることを痛感した」という感想もよく耳にします。前述したように、「日本代表プログラム」では語学力を不問にし





ています。「海外に出るためには、まずは語学ができるようになってから」という多くの日本人が持ちがちな発想が、若者たちの行動力を妨げる要因になっており、できない理由を見付けて行動を起こすことをためらうよりも、情熱や好奇心を優先して、まずは一歩踏み出すことの大切さを伝えていきたいと考え、あえて語学力を不問にしたのです。

実際には、語学力が不十分なまま留学したトビタテ生は、現地で様々な壁に突き当たります。そのため、そのようなトビタテ生は、留学後の方が語学学習に対して真剣になります。

トビタテ生のうち、既に3,000人程度が社会人になっていますが、彼らの好奇心や情熱は止まりません。普通は一度社会に出ると、勤めている会社を辞めてまで海外の大学に長期留学することは勇気があるものですが、トビタテ生はどんどん留学していくのです。

またある女性は、ヨーロッパの大学に留学して宇宙工学を学んだ後、JAXA（国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構）に就職し、人工衛星の研究に携わっていました。ところが数年ほど勤めた後にJAXAを退職して、フランスの天文台に留学。そして今は、JAXAの宇宙飛行士の公募にエントリーして、選考に残っているそうです。このように、まるで隣の町に引っ越すような感覚で、軽やかに国境を越えて行動できる人材が育っています。

ただし一方で、社会人になったトビタテ生のうち、約9割が国内で働いているのも事実です。海外企業への就職者が少ないのは、就労ビザの問題もありますが、やはり何と言っても障壁となっているのは語学力です。日本人の語学力の向上をどう図っていくかは、グローバル人材を輩出していく上で、引き続き大きな課題であると言えます。

23年度より

「新・日本代表プログラム」がスタート

「日本代表プログラム」は、22年度をもって第1ステージが終了します。この取り組みによって得られた成果の1つは、「日本代表プログラム」型の留学が、国費による海外留学支援の一部に取り入れられることです。国費を用いるため、留学志願者に対して学業成績や語学力の要件が課されるものの、留学生が主体的に留学計画を立てるといった「日本代表プログラム」ならではのエッセンスがそのまま採用されています。このプログラムが若者の成長に大きな効果があることを、国が認めたとのことだと思っています。



理系の研究留学が多いのも「トビタテ！留学JAPAN」の特徴の1つ

そして23年度からは、「新・日本代表プログラム」と名付けた、第2ステージがスタートします。期間は27年度までの5年間です。

第1ステージでは大学生を多く採用していましたが、第2ステージは、高校生を多く採用します。その背景には、大学生と比べて高校生の留学者数があまり伸びていないという実情があります。高校生のうちに一度留学を経験しておけば、大学でもまた留学したいと考えるでしょうし、社会人になってからも、海外に出ることの心理的なハードルが低くなるはずで、限られた財源を有効に活用するという点でも、高校生に投資するのは適切な選択であると思っています。

高校生コースでは、私たち事務局が募集する枠以外にも、全国12地域に留学モデル拠点地域を作り、地元の企業や自治体、高校などから構成されるコンソーシアム（協議会）が募集する枠も設ける予定です。地域にノウハウが伝われば、たとえ事務局がなくなったとしても、継続実施することが可能になります。

また第1ステージでは、合格者に地域格差が生じていました。そこで地方の留学機運を盛り上げるため、一定数の応募があった都道府県からは、合格者を必ず5名は出すようにしたいと考えています。

さらに、「価値イノベーション人材ネットワーク」という事業を新たに立ち上げます。これはトビタテ生のコミュニティを企業や自治体、NPOなどをつなげ、協働で社会課題の解決や社会価値の創造に取り組んでいこうというものです。事業名の通り、価値イノベーション人材を育成することが狙いです。

これらのように第2ステージでは、第1ステージ以上に取り組みを進化させていきたいと考えています。ぜひ私たちの活動に注目し、応援していただければと思います。

官民が協働し社会総掛かりで実施

文部科学省 大臣官房審議官（高等教育局及び科学技術政策連携担当） 西條 正明氏

「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」は、学業成績や語学力を問わず、「海外でこれやりたい」という強い情熱や好奇心を持つ若者を優先して選抜する、非常にユニークな留学プログラムです。このような大胆なプログラムは、国費による留学制度では、なかなか導入しにくい面があります。そこで官民が協働し、社会総掛かりで実施することにしました。

官民のうち、民には柔軟な発想力とスピード感を持って動くことができるという強みがあります。そもそもこのプロジェクトのアイデアは、民との対話から出たものでした。一方、官の強みは、官が加わることでプロジェクトに公的な意味合いが付与され、利害関係にとらわれず、多くの人が参画しやすくなることです。第1ステージでは様々な企業・団体、個人からの支援を得て、120億円もの支援金が集まりましたが、これは官民がそれぞれの強みを発揮できたからこそ実現できたのだと思っています。

支援企業・団体の皆様には、「今後社会が変わっていく中で、自ら課題を見つけ、解決に向けて行動できる力や、グローバルに活躍できる意欲・能力を持った若者を育てていかなくてはならない」という一致した思いのもと、プロジェクトに協力していただいています。「トビタテ！留学JAPAN」の事務局の運営も、支援企業・団体から出向者を出していただき、官民協働で行っています。

IIBC様もその1団体で、「あらゆる境界を越えて、世界で活躍する人材を育てること」を事業の柱の1つに据えていらっしゃいます。これは「トビタテ！留学JAPAN」が目指している方向性と完全に一致しています。IIBC様のような団体とプロジェクトをともに運営することができ、大変ありがたく思っています。

「トビタテ！留学JAPAN」は、23年度から第2ステージがスタートします。これまで通り、たくさんの若者たちに海外でチャレンジする機会を提供するとともに、新たに始まる「価値イノベーション人材ネットワーク」では、既に留学を経験したトビタテ生たちの能力を、社会課題の解決や価値創造などに結びつけていくことができると考えています。



世界に飛び出し挑戦する若者の背中を押し続けていきたい

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 GHRD室 室長 貴島 和美

IIBCは16年より、「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」の支援をしています。私自身は、17年から日本代表プログラムの選考委員や、留学しているトビタテ生のメンタリングに関わってきました。また20年6月から22年5月にかけて、「官民協働海外留学創出プロジェクト トビタテ！留学JAPAN」事務局に出向し、主に第2ステージの活動資金を、企業・団体・個人から募るためのファンドレイジング業務を担当しました。

出向中は、多くのトビタテ生たちと直接話す機会が得られました。彼ら、彼女らと接していて感じたのは、「まだまだ日本も捨てたものじゃない」ということです。皆さん、少しぐらいの困難に直面してもそれを跳ね返せる突破力を持っていますし、様々な分野で高いポテンシャルを感じさせるトビタテ生がたくさんいます。

そのような姿を見ていて、若いときの留学は、人を大きく成長させるということを実感しました。異国の地に足を踏み入れたときに、現地の人たちが自分をどう見ているかを意識し、自分の考えや思いをどう表現すれば相手に伝わるのか、といった経験を若いうちに積むことは、自分の軸を形成する上で重要な意味を持つのではないのでしょうか。また海外にいれば、日本を客観的に捉え理解することができるため、「日本人」というアイデンティティの形成にもつながると思います。

IIBCに戻った今、私はグローバル人材育成プログラム（GHRD事業）に携わっています。これまでは企業の人事担当者向けのプログラムが中心でしたが、「日本代表プログラム」での経験を踏まえ、高校生から30歳ぐらいまでの若者の意識が世界へと向かうようなプログラムを、より多く提供する方向へと舵を切ることにしました。具体的には、トビタテ生の協力も得ながら、「One Step Forward～越境した若者と考えるSDGs～」といったイベントを始めています。

「あなたと世界をつなぐ あなたと世界をつなぐ」というIIBCの新コーポレートスローガンになぞらえれば、「日本代表プログラム」もGHRD事業も、若者自身である「あなた」が成長していくことを支援する取り組みだと言えます。GHRD事業を通して、失敗を恐れず世界に飛び出すことの大切さを伝え、挑戦しようとする彼ら、彼女らの背中を押し続けていきたいと思っています。





TOEIC® L&R
公開テスト
300回記念
特別企画

継続的なアップデートから生まれる 英語能力の正確な測定力

40年以上の月日を経て、TOEIC® L&Rは、2022年8月21日の公開テストで、第300回を迎えることができました。第1回の公開テストが実施された1979年以降、ビジネスを取り巻く環境や、グローバルビジネスでの英語の使われ方に、大きな変化が生じています。TOEIC® L&Rは、時代に即した英語コミュニケーション能力に対応するためのアップデートを行ってきました。本企画では、それらの変遷を具体例とともに紹介します。

時代の変化を捉える調査を継続的に行う

TOEIC® L&Rは、日常生活やグローバルビジネスにおける、英語でのコミュニケーション能力を測るテストとして誕生し、第1回の公開テストが1979年12月2日に実施されました。以来、40年以上経過し、公開テストの実施回数が300回を超えた現在においても、テストの目的は当初と変わっていません。

しかし、79年当時と比べれば、ビジネスを取り巻く環境も、グローバルビジネスシーンにおける英語の使われ方も、大きな変容を遂げています。各々の時代において「日常生活やグローバルビジネスにおける英語でのコミュニケーション能力」を正確に測定するためには、時代の変化に合わせて、テストの内容

を変えていく必要があります。

例えばビジネス環境の変化について言えば、79年当時の通信手段はFAXが主流でしたが、2000年前後からEメールが活用されるようになり、やがてチャットなどでのやりとりが普及していきました。一方、通信手段の変化やグローバル化の進展は、ビジネスシーンでの英語の使われ方などにも変化をもたらしています。

その時々時代のコミュニケーションの実態に即した英語能力を測定するため、TOEIC® Programの開発・制作機関であるアメリカの非営利テスト開発機関ETSは、世界各地のビジネスの現場のコミュニケーション方法について継続的に調査してい

● TOEIC® L&Rの変遷

2006年の変更			
パート	Name of each part	パート名	問題数
リスニングセクション (約45分間)			
1	Photographs	写真描写問題	10
2	Question -Response	応答問題	30
3	(Short) Conversations (設問の音声化)	会話問題	30
4	(Short) Talks (設問の音声化)	説明文問題	30
リーディングセクション (75分間)			
5	Incomplete Sentences	短文穴埋め問題	40
6	Text Completion	長文穴埋め問題	12
7	Reading Comprehension	読解問題	
	・ Single passage	1つの文章	28
	・ Double passages	2つの文章	20

●変更点

【リスニング】問題の長文化、会話問題をセットにして出題、写真描写問題削減、発音バラエティの増加(アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドの発音を採用)

【リーディング】長文の穴埋め問題を採用、2つの文章を読み設問に答える問題の採用、問題文の長文化(一部)、誤文訂正問題削除

2016年の変更 (現行の内容)			
パート	Name of each part	パート名	問題数
リスニングセクション (約45分間)			
1	Photographs	写真描写問題	6
2	Question -Response	応答問題	25
3	Conversations (with and without a visual image (視覚素材))	会話問題	39
4	Talks (with and without a visual image)	説明文問題	30
リーディングセクション (75分間)			
5	Incomplete Sentences	短文穴埋め問題	30
6	Text Completion	長文穴埋め問題	16
7	Single passage	1つの文章	29
	Multiple passages	複数の文章	25

●変更点

【リスニング】写真描写・応答問題の設問数削減、会話問題の設問数増加、会話問題の中に発言が短くやり取りの多いものが増加、3名で会話する設問あり、Elisions(省略形)を含む会話の流れ、会話やトークの中で聞いたことと問題用紙の図などで見た情報に関連付けて解答する問題が増加、話し手が暗示している意図を問う問題が増加

【リーディング】短文穴埋め問題の設問数削減、長文穴埋め問題の設問が増加、文書の全体的な構成を理解しているかを問う設問が増加、チャットなどでの複数名がやり取りを行う設問が増加、パート7の設問数が増加、3つの関連する文章を読み理解する問題が増加、書き手が暗示している意図を問う設問が増加

ます。04年には、日本をはじめとした世界11カ国の機関・企業の協力を得て、働く環境の場で必要とされている英語能力を検証するためにサーベイを実施しました。その結果、実際のコミュニケーションで必要とされる英語能力を評価するために、より当時の実態に即した状況や設定をテスト上で再現することになりました。具体的には問題形式の一部を変更すべきであると判断し、TOEIC® L&Rのリニューアル版での実施を、06年5月の第122回公開テストより開始しました。

求められる英語能力の変化に対応し、問題形式を変更

変更点の一部の例を挙げると(TOEIC® L&Rの変遷「2006年の変更」参照)、まずリスニングセクションにおいて、アメリカだけでなく、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの英語の発音についても採用し、発音バラエティを増やしました。これは、当時ビジネスのグローバル化とともに、多様な英語に触れる機会が増加していることに対応したものです。また会話問題や説明文問題では、従来よりも長めの文章を含むようにしました。これはIT技術の進展によってもたらされた、情報量の増加やビジネスにおける言語使用の場面を、より実際に体現した例です。

リーディングセクションでは、文章を読む場面において、1つの単語の意味を文脈の中から推測する長文穴埋め問題を新設。読解問題では、関連する2つの文章を読んで設問に答えるという問題を新たに取り入れ、関連する複数の文章を読みながら、情報を整理する力を測定することになりました。一方、従来設定されていた誤文訂正問題については、実際のビジネスシーンにおいては、文章の誤りを訂正するという機会さはほど多くはないため、廃止することにしました。

06年におけるもう1つの大きな変更点としては、テストの開発・設計において、「エビデンス・センタード・デザイン」という最新の設計手法を採用したことが挙げられます。これは測ろうとしている言語能力を的確に測ることができる設問になっているかどうかを、裏付けとなるデータ(エビデンス)をもとに検証しながら、テストを設計していくというものです。これにより、受験者に対する受験後のフィードバックも、スコアの提示にとどまらず、詳細な情報提供を行うことが可能になりました。受験者にとっては、自身の英語学習の課題を把握するとともに、さらなる英語力の向上に向けた学習計画が立てやすくなりました。

ただし、06年のリニューアル時では、10点～990点のスコアによる評価についての変更は行わず、また受験者の能力に変化がなければ、何度受験してもスコアは一定に保たれるという特長についても、維持することにしました。さらには公平性の観点から、特定の国や地域独自の言い回しや、特定の文化的背景への理解が必要な問題は、これまで通り出題しないことにし

ました。

このように、日常生活やグローバルビジネスの場面で必要な英語能力を正確に測定する、というTOEIC® L&Rの特長を維持するために、問題形式の変更をはじめとする様々な取り組みを行ってきました。

テストの信頼性を保つためにアップデートを続けていく

TOEIC® L&Rは、16年にもリニューアルを行いました(TOEIC® L&Rの変遷「2016年の変更」参照)。06年からの10年の間に、スマートフォンやタブレットといった新たなデバイスが登場し、ビジネスにおけるコミュニケーションのスタイルにも変化が生じたからです。

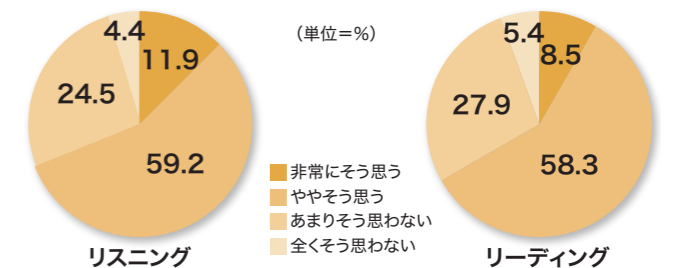
例えばリスニングセクションの会話問題では、3人以上の登場人物が、省略形を用いた発言を含んだ短いやりとりの会話をする問題を新設しました。実際の会話においても、一人ひとりが長々と発言するよりは、短いやりとりで会話が進むケースの方が一般的で、SNSを使ったコミュニケーションでは、さらにそうした傾向が顕著になっているからです。

リーディングセクションでは、読解問題の中の2つの文章を読んで設問に答えるという問題とともに、新たに3つの文章を読んで設問に答えるという問題も追加されました。06年から比較しても、さらにより多くの英語の文章や資料を読みこなすことが求められるようになっている状況を反映したものです。

TOEIC® L&Rは、企業において海外赴任や昇進・昇格の要件、大学・短大では単位認定などに利用されています。これはTOEIC® L&Rの信頼性が、企業や大学から認められているという1つの結果であると言えます。この先もグローバルビジネスにおける英語能力の指標として多くの皆様に活用していただけるように、ETSでは、時代の変化に即したビジネスコミュニケーションの実態を定期的に調査していく予定です。

● 2016年のリニューアルで、受験者の約7割がより実践的な内容になったことを実感

Q: 従来に比べて、より現実な状況や設定が再現されたテスト内容になったと感じますか?



【アンケート概要】実施時期：2016年6月22日～6月30日 実施方法：Web上でのアンケート 有効回答数：2,524人 対象者：16年5月29日の第210回TOEIC® L&R公開テスト(新形式問題導入後、第1回目)の受験者で、かつ16年1月、3月、4月のいずれかのTOEIC® L&R公開テストを受験している方 ※データは小数点第2位を四捨五入して表記しているため、合計が100%にならない場合がある



海外留学に向け必要な英語力と TOEIC® S&Wの効果的な活用法とは

群馬大学 国際センター 准教授 学長特別補佐 (グローバル化) 越智 貴子氏

群馬県前橋市に本部を置く群馬大学は、地域に根差し、世界的なレベルで広く社会に貢献する開かれた大学として国際化を推進しており、国際センターがその中心部局として業務を担っています。同センター准教授の越智貴子氏は、海外の大学との協定締結や、学生の海外派遣のほか、同大学のブランディングや、教育のデジタル化の推進なども担当しています。コロナ禍で学生の海外留学が困難になる中、オンラインで海外の大学の講義を受け、現地の学生と交流できる「グローバルキャンパス」をいち早く立ち上げた越智氏に、留学前に身につけておきたい英語力や、TOEIC® S&Wの有効な活用法などについて話を伺いました。

留学する前に身につけておきたい基本的な語彙力

新型コロナウイルス感染症の拡大により、学生の海外留学が困難な状況にありましたが、最近では、日本からの留学生の受け入れを再開する国が徐々に増え、当大学でも、留学先へと出発する学生が増えてきています。

留学と一口に言っても、語学研修などを主な目的とする短期留学と、交換留学生として海外の大学で学ぶ長期留学とでは、事前に身につけておくべき英語力は異なります。

短期留学においては、英語の基本的な語彙力を身につけておくことが重要です。コミュニケーションは、まず相手の話を聞き、それに対する答えや自分の考えを話すことで成立しますが、そもそも、会話の中に出てくる基本的な単語や表現を知らなければ、相手が話していることを聴きとれず、理解することができません。つまり、英語のリスニングでは、基本的な語彙力が不可欠なのです。

当大学の短期留学プログラムでは、学生が一定の語彙力を身につけていることを前提としており、研修では主に、リスニン

グ力とスピーキング力の強化を図ります。リスニングを行う際、「英語が聴きとれたら、今度はその答えを言葉にしてみよう」というように、スピーキングとのつながりを持たせ、自分の考えを自分の言葉で、きちんと伝えられる力を養う内容にしています。

長期留学プログラムに関しては、現地の大学において英語での授業を受け、エッセイを書いたり、プレゼンテーションを行ったりするため、語彙力やリスニング力などはもちろん、英語で書くために必要となる、アカデミックな内容の文献を理解するリーディング力が重要になります。

当大学の長期留学プログラムでは、短期留学のプログラムと同様の内容に加えて、リーディング力とライティング力を修得するプログラムを設け、4技能を体系的に身につけていく指導を行っています。

外部試験の受験は学生だけでなく教員にも有益

一方、英語学習を行っていく中で、自分がどのレベルの英語力を身につけているのか、また、自分にはどんな力が足りないのかを客観的に知ることができる外部試験を受験することは、モチベーションアップを図るためにも重要だと考えています。

当大学においても、留学プログラムに参加する学生には、留学前と留学後にTOEIC® S&Wを受験してもらい、留学によって英語力がどの程度伸びたかを測定しています。以前、留学プログラムに参加した学生が、TOEIC® S&Wのスコアを後輩に見せながら、「このプログラムに参加したら、スピーキングとライティングがこんなに伸びた」「スコアは就職活動にも役立つ」などとアドバイスしているのを耳にしたことがあります。TOEIC® S&Wは、英語での発信力を測定する指標になりますから、就職活動はもちろん、大学を卒業して社会人になってからも非常に役に立つと思います。

TOEIC® S&Wは、学生にとって多くのメリットがあるだけ

でなく、実は私たち教員にとっても非常に有益です。当大学において学生の留学前後のスコアを比較すると、留学後の英語力は総じて留学前より伸びていますが、以前、留学先やプログラムによって、その伸長度が異なることがありました。ある留学プログラムで、参加した学生のスピーキング力が思ったよりも伸びていないことが明らかになったのです。プログラムの内容を精査したところ、スピーキング力を伸ばす要素が少なかったことが分かり、その後、プログラムの内容を修正しました。

TOEIC® Program全体に言えることですが、TOEIC® S&Wは、比較的易しいものから難易度の高いものまで様々なレベルの問題が出題されるなど、英語力を細かく分析できるよう体系的に作られています。そのため、学生に定期的に受験してもらうことで、どんな力が身につく、どんな力が伸びていないかを客観的なデータとして把握することが可能です。それゆえ、教員が教育内容を見直す指標にもなり、より効果的な英語学習法や留学プログラムを提供するためにも、大いに役立つのです。

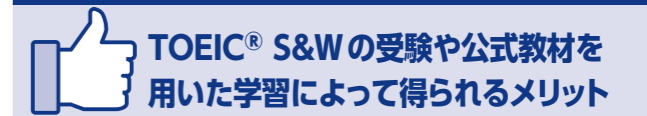
また、「英語力を高めるには、外国人と話すのが近道だ」とよく言われますが、普段の生活の中でそういった機会が多くあるわけではありません。そのような状況の中で英語学習を進めていく場合、例えばTOEIC® S&Wの問題は、日常生活のワンシーンや会話などに基づいたものが非常に多く、文脈にもリアリティがあるため、いわゆる「使える英語」に触れることが可能です。つまり、TOEIC® S&Wを受験したり、受験に向け学習することで、英語でのコミュニケーション力が、自然に身につけていくと考えています。

外部試験の中には、コツさえつかめば、ある程度の点数がとれてしまうものもありますが、TOEIC® S&Wの問題は、英語の文脈を理解し、その文脈の中で問われたことについて考え解答する必要があるため、留学先で英語を実際に使うことができる力、つまり真の英語力が測定できると思います。

英語でのコミュニケーションが自分の可能性を広げる

教員が教育内容を見直しても、学生の中には、自分なりに英語の勉強を続けているのに、なかなか成果が出ないという人がどうしても出てきます。そうした学生のほとんどは、英語の語彙力が十分でないという傾向があります。

私はそのような学生に対して、英語の語彙力を上げるために、単語帳などを使い暗記するのではなく、目と耳を使うように指導しています。例えば英語のテレビドラマを、英語の字幕を表示しながら視聴することは非常に効果的です。ドラマを見ていれば、シーンや登場人物の会話の流れといった文脈から、「こういうときに、この単語を使うのか」「英語にはこういう言い回しがあるのか」と気づくことが可能で、かつ、登場人物が話す英語を耳で聴きとり、同時に英語の字幕を目で見確認す



- 身につけている英語力と足りない力を測定できる
- 英語力の伸長度を正確に測定できる
- 実践的な英語力が身につけているか測定できる
- 「使える英語」に触れることができる
- 英語でのコミュニケーション力が自然に身につく
- 就職活動や社会人になってからも役立つ
- 教育プログラムの見直しに向けた指標にできるなど、教員の方にも有益

るため、より自然に語彙力を向上させることができるのです。

ひと昔前の日本では、英語力を向上させる理由を聞かれると、多くの人が「学校の教科の1つだから」と答えていたのではないのでしょうか。もちろん、学校で英語を学ぶことは重要ですが、英語力を向上させる本来の目的は、世界中の様々な人々とコミュニケーションするためだと私は考えています。英語はあくまでコミュニケーションのためのツールです。自分が今まで行ったことのない場所に行くと人と出会い、お互いを理解し、未知の文化に出会うための手段だと考えれば、英語学習もきっと楽しくなるはずですよ。

とはいえ、日本人にとって英語は母語ではないため、「相手の言うことが聴きとれないかもしれない」「自分の話していることが伝わらないのではないかと」と、緊張してしまうこともあるでしょうし、学習の途中でつまづくこともあると思います。そういうときはまず、意識的に英語との距離を縮める工夫をしてみるといいのではないのでしょうか。例えば、英語の映画やドラマを見るのも良いですし、家族や親しい友人など、誰とでもいいので日本語を使わずに英語で話してみたり、自分が日常的にやっていることを頭の中で英語に置き換えたりしながら行動してみるのも1つの工夫です。普段の生活の中に、積極的に英語を取り入れてみることをお勧めします。

英語でのコミュニケーションは、今まで知らなかった世界を知ることができ、人生を豊かにしてくれると思います。将来を担う学生の皆さんには、身近なところに英語を取り入れ、外部試験を上手に活用しながら学習を進めることで、自分の新しい可能性を開いてほしいと考えています。



群馬大学 国際センター 准教授 学長特別補佐 (グローバル化) 越智 貴子氏



英語がもたらした私のターニングポイント 第15回

リアルな英語って面白い そのワクワクが発音探究の出発点だった

英語の発音の国ごとの違いをコント風に仕立てた動画などで人気を集める、YouTuberのだいじろーさん。中学生のときに語学研修で行ったオーストラリアで、ネイティブスピーカーのリアルな英語に触れたことで、その面白さに目覚めたそうです。

2週間の語学研修でカルチャーショック 英語の面白さに目覚めた

YouTubeで英語の発音を題材にしたコンテンツを配信しながら、個人や企業向けに「英語発音のコーチング」を行っています。僕自身、ネイティブスピーカーでも帰国子女でもなく、日本で生まれ育った中で英語に興味を持ち、独学で英語を身につけました。そんな経験が少しでも誰かの役に立てばと思っています。

僕が英語にのめり込むきっかけとなったのは、中学2年のときに参加した2週間のオーストラリア語学研修でした。滞在先はパースの田舎町。地元の人々が、家でも街中でもどこでもはだして生活していることにまず驚きました。学校生活もまるで違って、教室の机の並びはガタガタだし、服装も自由で、家が

ら持ってきたお菓子を食べていても誰にも叱られない。自分の中の常識がグラグラと崩れて、「国が違うとこんなにも違うのか。世界は広いんだな」と大きな衝撃を受けました。

英語についても驚くことばかりでした。例えばあるとき、隣の席の子に借りた消しゴムを返そうとしたら、「You can keep it.」と言うんです。「持っていていいよ」という表現に“keep”を使うなんて、全く思いもなかった。学校で習った英語とは全然違う、ネイティブスピーカーのリアルな英語がとにかく新鮮で、新しい言葉や意外な表現に出合うたびにワクワクしました。

すっかり英語の面白さに目覚めて、帰国後は英語関連の本を買い集め、映画も英語を意識して観るようになりました。「THIS IS ENGLAND」という映画では、初めてイギリスの労働者階級が話す英語を聞いて、これも英語なのかと驚きました。そこか

● YouTuber/英語発音トレーナー
だいじろーさん

Profile

1989年北海道生まれ。立命館アジア太平洋大学に、英語力が必要とされる外国人枠で入学。在学中に香港理工大学とヘルシンキ大学に留学。その後タイへ移住し7年間過ごす。バックパッカーとして20カ国ほどを訪れる。帰国後、2019年に発音系YouTubeチャンネルを開設。学生時代に会った様々な国籍の人々の英語の発音に衝撃を受け、独学で音声を勉強し、あらゆる言語の発音の研究・モノマネを人生の生きがいにしている。

ら、オーストラリアの英語はこうだったとか、色々な英語をコレクションしていくようになったのです。

もともと父が秋田県、母が佐賀県出身ですが、僕自身は北海道で育ったこともあり、子どもの頃から多様な方言に囲まれていました。だから言語の発音やアクセントというものに、人一倍敏感だったのかもしれない。

『ナマった英語のリスニング』という本をバイブルのように何度も何度も読み返し、映画のセリフを丸暗記したり、外国人とメール交換したり、思い付くことは何でもやりました。勉強というより、英語を知るのが楽しくて仕方なかった感じです。

● ネイティブスピーカーの持つ 英語の感覚を意識する

実は昔から僕は赤面症で、人前で話すのがすごく苦手でした。けれども、高校で行われた英語のスピーチコンテストでは全く緊張しませんでした。英語を話すときは、普段の自分とは別のキャラクターを演じている感覚だったからです。これは僕にとっては大きな出来事でした。英語の力を借りればコンプレックスも乗り越えられる。そう思うと英語の勉強にもますます力が入りました。

高校卒業後は九州の立命館アジア太平洋大学に、英語力が必要とされる外国人枠で入学しました。学生の半数が外国籍で、学生寮には100カ国ぐらゐの留学生がいて、様々なアクセントの英語が飛び交っていました。発音を探究したくて音声学を学んでいた僕には理想的な環境です。「100カ国の学生の英語を集めれば、世界の発音コレクションが作れるのじゃないか」と思い付いて、留学生にインタビューしたりもしました。とはいっても、15人くらいでうやむやに頓挫してしまっただけです。

授業は全て英語で、寮でも留学生たちと一緒に過ごし、24時間英語漬けの生活でした。大学1年の時点でTOEIC® L&R915点を獲得し、それなりに不自由なく英語が使える気になっていました。しかし、2年次に香港理工大学に留学して、その自信は見事に打ち砕かれました。香港の学生はレベルが全然違った。ディスカッションなどの場面で、彼らと対等に渡り合えるような言い回しが、自分の英語力からは出てこないのです。中学2年のときの“You can keep it.”と同じです。ネイティブスピーカーが感じている“keep”という単語の本質が分からない



大学2年次に留学した香港では、ネイティブスピーカーの英語の感覚との間には大きな壁があると痛感したという



98万回以上再生された「話が噛み合わないアメリカ人とイギリス人コント」

と、絶対にその使い方はできない。ネイティブスピーカーの英語の感覚との間には大きな壁があると痛感しました。

それからは、ちょっとした言い回し1つでも気になることがあったら、教科書で習ってきたことはいったん忘れて、何人ものネイティブスピーカーに意見を聞きながら、自分なりに掘り下げて意味や使い方を捉え直すようになりました。ネイティブスピーカーの感覚はネイティブスピーカーに聞くのが一番です。それも1人だと偏った考えもあるので、10人くらいからサンプルを集めると正しいニュアンスが分かってきます。母語でない以上、ネイティブスピーカーの持つ英語の感覚を100%理解することは難しいかもしれませんが、意識することで彼らに近づくことはできると思います。

● 発音のエキスパートとして 英語学習者の力になりたい

大学を出て7年間ほどタイに滞在し、2019年に日本に帰国して、YouTube「だいじろー」チャンネルを開設しました。当初は何を発信するか試行錯誤していたのですが、「イギリス人とアメリカ人の発音や言い回しの違い」をコント風に仕立てた動画が目ざされ、思い切って発音系コンテンツをメインにすると、一気にチャンネル登録者が増えました。正直、英語の発音にこんなたくさんの人が興味を持つとは思いませんでした。「発音を教えてほしい」という声も多く寄せられて、仕事として英語の発音指導を行うようになりました。

日本人は英語上級者でも、発音を苦手と感じている人が多いようです。僕自身の経験から言うと、英語の発音は1人で練習しても限界があります。自分の声を録音して自分で聞いても、何をどう直したらいいかが分かりません。やはり第三者から客観的、論理的にフィードバックをもらうことが、効率よく発音を習得する近道だと思います。

自分の興味にまかせて、中学生の頃からずっと英語と向き合ってきました。それが今こうして仕事になり、人から必要とされるようになったのはとてもうれしいことです。これからも発音のエキスパートとして、英語だけでなく世界のあらゆる言語の発音を研究し、発見したことを面白おかしく日本の皆さんに紹介していくつもりです。そしていつか本当に、『世界の英語発音辞典』を作り上げられたらいいなと思っています。

英語学習では、知識と技能の習得が基本となります。知識は、宣言的知識 (declarative knowledge) と手続き的知識 (procedural knowledge) に分けることができます。宣言的知識は事実や原理、概念などに関する知識で、英語学習でいえば、主語が3人称単数現在形の時sを付ける等の文法規則のことです。これに対して手続き的知識とは、文字通り手続きに関する知識のことで、英語学習でいえば、英語を使ってコミュニケーションをするときに三単現のsを付けられるようになることです。英語学習では宣言的知識を学ぶだけ

ではなく、それを手続き的知識にするための言語活動がとても重要になります。言語活動とは決められた表現を使った単なる反復練習ではありません。実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動です。

従来の英語学習では、手続き的知識を習得する段階で終わっており、学習者に汎用力を身につけさせるレベルまでには至っていませんでした。しかしこれからの時代の英語学習は、この段階で止まっているはいけません。汎用力には知識活用力に加え、批判的思考力や課題設定・課題解決力が含まれます。

汎用力は最近ではコンピテンシー (competency) と呼ばれることが多く、この力に関する研究は世界中で盛んに行われております。OECD (経済協力開発機構) は2015年にEducation 2030プロジェクトを立ち上げ、予測困難な時代である2030年の世界を生き抜くために、子どもたちに必要な力は何かについてLearning Compass 2030を発表しています。米国でも複数のプロジェクトが立ち上げられ、コンピテンシーのことを21st Century Skillsと呼んでいます。日本の国立教育政策研究所は21世紀型能力という用語を使っています。心理学からのアプローチでは非認知能力 (Non-cognitive skills) という用語が使用されています。呼び方は様々ですが、意味するところは同じで全て汎用力のことです。学習指導要領も、これらの新しい能力観に関する世界の動向を把握した上で作成されております。

汎用力の中で、21世紀の教育にとっても重要な力として4つ

Study1
汎用力からの視点

英語学習を通して 汎用力を身につけよう

大妻女子大学教授、早稲田大学講師
服部 孝彦氏

Point

- 習得した知識を活用する力を身につける
- 分析・創造といった高次思考力を身につける
- 汎用力に結び付く力を身につける

のCをあげることができません。Critical Thinking (批判的思考)、Creativity (創造)、Communication (コミュニケーション) と Collaboration (協働) です。中でも、これからの英語学習で欠かすことができないのがCritical ThinkingとCreativityです。物事をクリティカルに捉え、論理的に思考する力と、従来の枠組みにとらわれることなく、新しい視点から発想する力は汎用力に直結するからです。学習指導要領における学力の3要素は、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」ですが、

Critical ThinkingとCreativityは「思考力・判断力・表現力」にあたります。

Anderson & Krathwohl によって修正されたBloomの思考の分類を使うと、思考はLOTS (Lower-order Thinking Skills、低次思考力) とHOTS (Higher-order Thinking Skills、高次思考力) に分けることができます。LOTSは記憶、理解、応用などの思考を表し、HOTSは分析、評価、創造などの思考を表しています。LOTSは正解がある思考法で、従来の

日本の英語学習ではLOTS止まりでした。最近のOECD等の考え方を見れば明らかな通り、これからの時代を生き抜くためにはHOTSが大切です。HOTSは深い思考力を駆使するもので、必ずしも正解があるわけではありません。知っている事実や概念を統合して複合的な問題を解決しようとするために英語で議論すればHOTSと英語力が身につきます。例えば、地球的課題である難

民・移民問題、地球温暖化等の問題を解決するための議論を英語でしてみてください。英語の検定試験を見ていても、TOEIC® S&Wの試験で高スコアを得ようとした場合、HOTSがどうしても必要になるといえます。

Profile

はっとり・たかひこ 初等・中等・高等教育を日米両国で受けた元帰国子女。言語学博士 (Ph.D.)。米国ケンタッキー州のマレー州立大学 (MSU) 大学院客員教授等を経て現職。元NHK英語教育番組講師。文部科学省WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 等の、国のグローバル化のためのリーディング・プロジェクトの中心メンバー。主な著書に文科省検定中学及び高校英語教科書ほか、著書191冊、学術誌発表論文139編。日米間を頻りに往復しながら、米国の大学での講義・講演もこなす。



復習をすることで、知識の漆塗りができる

日本で英語学習をしていると、英語圏で暮らす場合と比べ、英語に触れる時間は格段に少なくなります。その中で、英語力を着実に伸ばしていくためには、一度触れた英語は自分の中にインストールしたいものです。そのためには、知識の漆塗りを行うことが大事になります。いわゆる「復習」と呼ばれるもの。この提案に対して、「一度見たことがあるから覚えている」とか「やる意味がない」とか「同じことをやるのは飽きる」とか、否定的な反応が多いです。しかし、人は一度見たも

のを瞬時に覚えられほど賢くありませんし、繰り返し取り組むことで定着度が高まるため、復習をする意味は大いにあります。人は、新しい知識を吸収したり、新しい問題に挑戦したりすることを好みます。ただ、先述したように、そこから「復習」の観点が抜け落ちていくと、ザルに水を通すように、どんどん忘れていってしまうのも事実です。せっかく学んだものは自分の知識に変えていきたいものです。

自分にアポを取る

「復習」の重要性をご理解いただけたいと思いますが、それでも優先順位が低くなってしまいがちです。以前と同じ英語に触れるよりも、新しいことに取り組みたいと思ってしまうからです。復習の仕組み作りとして、「時間と場所を固定する」ことを勧めています。英語学習の習慣作りにつながります。友人との約束や仕事の時間をスケジュールに入れるように、英語学習の時間も書き込みましょ

う。自分との約束をするのです。他人との約束も自分との約束も同等に扱うことを目指してください。これに加えて、英語学習のアポに場所の情報を記入すると、アポがさらにリアルになります。「家の近くのカフェに寄って、19時から英文法の勉強をする」ように、具体性を上げていくと良いです。英語学習の習慣化を実現していくことができます。

レベルアップの記録を付ける

英語力とは目に見えないものです。勉強を積み重ねても、できる実感を抱くことができないこともあるでしょう。そこで有

Study2
復習の視点

繰り返し復習をすることで 知識の漆塗りをする

東京海洋大学非常勤講師
渡邊 淳氏

Point

- 時間と場所を固定し、英語学習を習慣に
- 学習記録を付け、成長を実感する
- スキマ時間には単語を復習する

効なのが「記録」です。自分とアポを取って、勉強を実行したら、学習記録を付けるのです。学習時間や内容はもちろん、気付きも加えるとさらに良いです。自分の気付きを書き留める際に、良いことを見付けるように心掛けてください。「単語30語しか覚えられなかった」など、ネガティブな気付きばかり書く方がいます。もちろん、悪かった部分を見つけて反省することは大事です。しかし、英語力の上達を感じるためには、良かったことを記録していく必要があるのです。先ほどの例を利用するならば、「単語30語も覚えら

れた」と言い換えると、英語力向上を感じやすくなります。

スキマ時間で復習するならば「単語」一択

復習の対象はどんな素材でも構いません。自分が使える時間に依じて、強化したいポイントに応じて、変えていくのが適切です。ただ、忙しい皆さんが効率よく英語力アップするためには、スキマ時間の有効活用が必要でしょう。そこでお勧めしたいのが「単語」です。じっくり時間を確保するのも良いのですが、単語学習自体が単調で退屈になりがちのため、スキマ時間、つまり、短時間で触れると効果的です。そして、その回数を増やしていきます。「1回でじっくり覚える」のではなく、「複数回サクッと覚えるのを繰り返す」というイメージです。単語暗記は何回触れたかが勝負です。スキマ時間に単語の復習をして、単語力アップの壁を破り、さらなる英語力を手に入れましょう。

最後に、英語学習は自分のがんばりが返ってくるものだと思じています。諦めずに食らいついていきましょう。応援しています。



Profile

わたなべ・あつし 1984年生まれ。東京外国語大学ポルトガル語学科卒業。留学なしでTOEIC® L&R 990点を取得。フリーランスの編集者・ライターをしながら、東京海洋大学で非常勤講師を務めている。また、porpor (ぼるぼる) という名前で、ブログやTwitterを中心に、英語学習等に関する情報を発信している。『TOEIC® L&R TEST 戦略特急 スコア育成計画』(朝日新聞出版) など著書多数。

英語を実践する場を市民に提供する 「英語が話せるまち SASEBO プロジェクト」

「佐世保暮らし＝英語が身につく」を目指して 市の新たな魅力を創出する

国際大学やアメリカ軍基地が所在するなど、国際色豊かな風土を持つ長崎県佐世保市。留学生や永住者、アメリカ軍基地に勤める人々といった、多くの外国人が暮らしています。

同市はその特色を生かし、2017年度より「英語が話せるまち SASEBO プロジェクト」に取り組んでいます。発端となったのは、16年に開催された「地方創生フォーラム in SASEBO」内で行われた、市にゆかりのある事業者3名と佐世保市長によるトークセッション。そこで市長が、地域活性化のために、国際色豊かな風土を生かしたまち作りをしたいと話したことがきっかけで、本プロジェクトが発足しました。



Sasebo Expoでは、文化体験を通して国際交流を深めている

佐世保市教育委員会教育総務部社会教育課の竹藤和馬氏は、「『佐世保暮らし＝英語が身につく』という新たな魅力の創出を目指して、市民に対し英語を実践できる場を提供し、グローバル人材の育成を図っています」と語ります。

プロジェクトは、

全市民を対象に英語や外国の文化に触れ実践できる環境を提供する「英語シャワー事業」と、子どもたちの教育環境を充実させる事業の2つに大別されます。

英語と外国の文化に触れる機会を提供し グローバル人材を育成する

英語シャワー事業の内容は多岐にわたり、書道や佐世保独楽などの文化体験を通じて国際交流を深める Sasebo Expo や、国際交流大運動会、地域のコミュニティセンターでエクササイズや料理などの講座を通して英語を学ぶ English ステーション、市内のローカル情報を英語と日本語で発信する Sasebo E Channel などがあります。Sasebo Expo や国際交流大運動会には、市内の高校生らが通訳ボランティアとして参加。語学力にかかわらず、英語や外国の文化に興味がある生徒たちがボランティアを務め、外国人参加者とのコミュニケーションに挑戦しています。

一方、子どもたちの教育環境の充実を図る事業では、市内の全公立小学校の4年生を対象に、市内在住の外国人が学校を訪問し、ゲームなどを通して英語に触れる場を提供する Fun English Camp や、参加を希望する市内の公立中学校の生徒を対象に、外国人とコミュニケーションをしながら、テーマパーク「ハウステンボス」を散策する Challenge English Camp など実施されています。

そして、プロジェクトの中で特に注力しているのが、21年度からスタートした「SASEBO グローバルキッズ・チャレンジ」。参加を希望する市内の小学6年生を対象に、英語のゲームや、ファストフード店での注文のロールプレイング、ハロウィンなどのイベント、アメリカやイギリスの歴史や文化、生活について学ぶことなどを通して、楽しみながら英語と外国の文化に触れられるプログラムを実施しています。参加者が積極的に英語を使って質問をするなど、学習意欲が非常に高いこともあり、「将来的にはアメリカ軍基地内にあるフードコートに行き、実際に英語で注文をしてみる」といった経験もさせてあげられたら良いなと思っています」と竹藤氏は今後への期待を語っていました。

プロジェクトの反響は上々で、日本人参加者からは、生の英語に触れることができ良かった、初めて外国人の友人ができたといった感想が寄せられました。

今後は、プロジェクトの認知度を高めるべく、情報発信にさらに力を入れていきたいと竹藤氏。また、姉妹都市交流を推進する部局など、他の部局も巻き込みながら、新たな取り組みを創出していきたいと考えているそうです。

地域の特色を生かしながら、市民に英語と外国の文化に触れる機会を提供する、「英語が話せるまち SASEBO プロジェクト」。佐世保市の挑戦はこれからも続いていきます。

佐世保市教育委員会教育総務部社会教育課の竹藤和馬氏

「TOEICの日」オンラインイベント

3つのSNS イベントを実施



2022年8月19日(金)から10月19日(水)までの2カ月間にわたり、「10月19日＝TOEICの日」にちなんで3つのSNS イベントを実施しました。このイベントは、英語に触れて、英語を楽しむ日にさせていただこうと2021年から実施し、今年で2回目となります。

3つのSNS イベント

① Instagram : #英語で書いてみた

「#英語で書いてみた」「#TOEICの日」を付けて、楽しい一時、幸せを感じた場面、好きなモノやコトなどを写真や動画に収め、「英語を添えて」Instagramに多くの方に投稿していただきました。投稿された写真は、総集編の動画とし、IIBC公式サイトやYouTubeにおいて紹介する予定です。

■300回ありがとう！プレゼントキャンペーン

TOEIC® L&R 公開テスト 300回を達成

2022年8月にTOEIC® L&R公開テストが、1979年12月の「第1回TOEIC® L&R公開テスト」から数えて300回目の節目を迎えました。そこで、TOEIC® Programを受験していただいている皆様への日頃の感謝を込めて、「300回ありがとう！プレゼントキャンペーン」を実施。第300回～第305回のTOEIC® L&R 公開テストに申し込みいただいた方の中から抽選で、計1,800名の方にオリジナルノベルティをプレゼントしました。

② Twitter : #TOEICの日に目標宣言

昨年好評だった「#TOEICの日に目標宣言」を付けて「英語で実現したいこと」をTwitterに投稿するイベントでは、今年も多くの方に参加していただきました。10月19日が英語学習者の皆様の「目標宣言日」として定着することを願っております。

③ YouTube : #TOEIC公式みんなで模擬受験

「TOEICの日」当日の19時頃に、YouTubeプレミア公開を通してみんなで一緒にTOEIC® L&R模擬試験を受験するという企画を実施しました。予想をはるかに超えるエントリーをいただきました。このイベントが皆様の学習の一助となることを願っています。

そのほか、当日には様々な企業・団体様から、Twitterを通してフォローやリツイートをしていただき、「TOEICの日」がトレンド入りするなど多くの方に注目していただきました。

300回記念
オリジナル
タンブラーなどを
プレゼントしました



時代とともに歩み続けるテスト

IIBC 調査研究室

本連載では、TOEIC® Programを開発するETSが、テスト品質の維持向上のためにしている取り組みについて、お伝えしていきます。

今回も引き続きテストの「妥当性」を取り上げたいと思います。まずは前回のポイント2点を振り返りましょう。

1.ETSではテストの品質維持向上に向け、以下の3要素を高い水準で満たすため、常に自己点検している

- 妥当性：測るべきことを、測れている
- 信頼性：テスト結果に一貫性がある
- 公平性：誰にでも公平なテストである

2.TOEIC® L&Rの開発スタート時、ETSは「妥当性」担保のため、「測るべきこと」を明確にすべく、「測定対象の能力」を実地調査し、言語モデルを構築した

それでは、本記事では「妥当性」について、どのような検証が行われたのかを見ていきましょう。実は、TOEIC® L&Rの本格的な妥当性検証、つまり「測るべきことを、測れているか」を実証するための検証は、第1回公開テスト実施の直後に、実際の受験結果データを用いて行われました。その検証をETSでは、Initial Validity Study (初期妥当性調査)と呼んでいます。もちろん、設計からパイロット実施と評価までの全プロセスを通じて、一貫して妥当性を確認しながら開発が進められ、一定の妥当性の確認はできていたのですが、“本格的な妥当性検証”は公開テスト実施後だったのです。なぜ、実施前ではなく、実施後だったのか？ その理由はETSの研究員Donald Powersの言葉を借りると、「テスト開発者はテストの提供前にも妥当性検証をする必要があるが、**本当の意味での妥当性検証は、受験**

者が真剣にテストに向き合う段階で初めて可能となる」ためです。事前の試行的な環境ではなく、受験者のその後の人生を左右し得るような本番環境で、真剣に受験していただいたTOEIC® L&Rのスコアデータを用いることが、妥当性検証の精度や信憑性を上げる上で非常に重要な要素となるからです。

Initial Validity Study では、TOEIC® L&Rの受験者500名をスコア帯ごとにグルーピングして抽出し、妥当性が確立している、言い換えれば高いスコア取得者には高い英語コミュニケーション能力があることが検証されている別のテスト(各技能を直接測定するテストや、TOEFL®テスト)を受験してもらい、TOEIC® L&Rと各テストの結果に十分な相関性があるかを検証しました。統計分析の結果、TOEIC® L&Rと、各テストの間には高い相関性があることが明らかになり、TOEIC® L&Rの妥当性を裏付ける結果となりました。

実は、こうして妥当性が証明されても、妥当性の追求は続きます。妥当性を裏付けるエビデンスは多いほど良いとも言われます。また、時代や環境の変化に伴いテスト自体が改訂・アップデートされれば、改めて妥当性検証が必要になります。実際TOEIC® L&Rも2006年のテスト改訂時、16年のテスト内容のアップデート時に、妥当性検証を実施しています。先のPowersいわく“...validation is a never-ending process, and the process still continues for the TOEIC® Tests.”。まさにTOEIC® L&Rは時代とともにnever-ending processを歩み続けるテストと言えるでしょう。今回は「信頼性」を取り上げます。

TOEIC® TestsはTOEIC® L&RとTOEIC® S&Wの総称。TOEIC® L&RはTOEIC® Listening & Reading Test、TOEIC® S&WはTOEIC® Speaking & Writing Testsの略称

本誌は公式サイトでもご覧いただけます。

https://www.iibc-global.org/iibc/activity/iibc_newsletter.html

IIBC NEWSLETTER

検索



あなたが世界をつなぐ
あなたと世界をつなぐ

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

IIBC公式サイト <https://www.iibc-global.org>

外部からの寄稿や発言は、必ずしも当協会の見解を表明するものではありません。

【お問い合わせ】

ブランドマネジメントチーム iibcmktg@iibc-global.org